

私は仕事の関係で、50歳代をイタリア、トルコ、フランスで過ごしました。その三つの国で、印象に残っている「言葉」を振り返ってみたいと思います。

50歳を迎えたのはイタリアのミラノでした。そのイタリアで、いちばん懐かしく思いだす言葉は「マンマ・ミーア」ですね。この言葉、直接の意味は、私のお母さんです。しかし、もっぱら「マジですか。なんてこった!」という時に使われます。イタリアという国は美しい地方都市を持つ、魅力的でとても愛すべき国なのですが、なかなか融通無碍と言いますか、いい加減なところも多く、3年弱の滞在の中で、幾度となくマンマ・ミーア!と叫びたくなり、また実際に叫んでいました。そういう意味で、とても懐かしいイタリア語なのです。

フィレンツェの大聖堂にて。イタリアで一番好きな街。

次に赴任したのはトルコのイスタンブールです。トルコは「文明の十字路」と呼ばれ、欧州とアジアと中東が交差するエキゾチックな国です。またとても親日的な国でもあります。その言葉は、英語やラテン語系とは全く異なります。曜日も、金曜日は「礼拝の日」、土曜日は「その翌日」、日曜日は「バザールの日」みたいな名前になっていて、太陽、月、火星、水星のような並びではありません。そんなトルコ語の中で最も印象深く覚えているのは、これはもうダントツで「インシャッラー」です。これ



は、「神（アッラー）の思し召し」という意味ですが、どういう時に使うかといいますと、「約束したいけど、できるかどうかわからない。」という場合に使います。

私：「じゃあ来週までに、がんばってここまで仕上げましょう!」

トルコ人：「わかりました。そうしましょう。インシャッラー。」

この会話では、トルコ人は、「私はがんばりますが、何か私の力の及ばないところで、できないかも知れません。

それは私のせいではなく、神の思し召しと考えて下さいね。」というくらいの感じですよ。



イスタンブールで開業した銀行で、トルコ人のスタッフと。

三か国目となったフランスではパリに駐在しました。

フランス語は、その美しい響きで有名ですが、学ぶ立場からすると、やたら音が結びつき(リエゾン)、短くなって大変聞き取りにくいという難しさがありました。フランスは、フランス革命により、欧州・世界を近代に導いた国です。一人一人が自分の意見を持ち、安易に他人と同調しないことを良しとする気風があります。そんなフランスで私が印象深かった言葉は、「セ・ラ・フランス」です。「それがフランスだ」という意味になります。

あなたがフランスを訪問したとしますね。初めは美しいパリの風景に心を打たれるばかりですが、そのうち「なんか、それって、おかしくないですか?」「なんで、そんなことするんですか?」「いやいや、それはないでしょう!？」と、いささか、否定的な感想を持つ場面に出くわすでしょう。そうした疑問をフランス人にぶつけた時に、彼(彼女)が胸を張って応える言葉です。



2021 年 10 月のパリ・マラソン。コロナで 2 年ぶりの開催となった。3:55 で完走。

外国人にとって印象的な言葉には、その国のお国柄がよくあらわれると思います。私の知っている多くの外国人が、日本に来て印象深かった日本語として「どうも。どうも。」と言います。確かによく使いますよね。さて、この言葉、日本人の特性に合わせ、どう説明したらいいでしょうか。